

乍恐以書付奉願上候

御当国種痘初発は私師元敬手續^ニ 而
伝来門人等是迄数千人植試仕候、然処庸医
或は素人共其術を不知見聞而已^ニ 而相行候故、
天然痘流行之節再感之もの又は種痘植処
悪く死失之ものも有之哉^ニ 承り、歎鋪奉存候、何卒
御当国^ニ も種痘館相定候ハ、前頭不束之儀
無之哉^ニ 奉存候、就而は師元敬右一条は深く
歎息罷在候中、去冬相果申候、然処実子吾一
幼年故、不肖之私後見罷在候、依之奉願上候は吾一
宅之種痘館御免被下置候ハ、謝儀等^ニ は不拘
門人一同尽力聊不束之儀無之様可仕候間、何分
御許容被成下度奉願上候、右願之通
御聞濟被下置候ハ、元敬深志之程も相頭れ
且吾一相続之基と門人一同難有奉存候、以上

明治元辰年十二月

願人 町村一後見
之 醫師秀泉^印
式 門人惣代
同 断 春林^印

判事
御役所

右之通奉願上候^ニ 付奥印仕候、以上

振救方

福井瑞泉^印

(端裏朱書)

「吾一宅え自分之勝手寄
種痘館相立候儀ハ不苦事^印」